

なかった。しかし、アーサー・ロイドやハンス・ハースなど、二〇世紀初頭に仏耶一致論を唱えた人物が当時一若手僧侶に過ぎなかった多田鼎に着目し、彼の著書を翻訳したりヨーロッパに紹介したりしている点は注目に値する。キリスト教関係者が浄土教に一神教的な神観念を見いだそうとする試みは多田以前から存在する。しかし、浄土真宗の伝統的な因習から離れて内観による罪の自覚を重視し、全ては仏恩であると捉え、しかし暁烏と異なりあくまで倫理的悪は否定されるべきものとし、さらに Grace と同一の語となった「恩寵」という言葉を多用した多田鼎の恩寵主義は、当時の仏耶一致論者にとっては思想的に好都合な存在だったのではないかと考えられる。

### 横川顕正の『禅思想史』観

和田 真 二

横川顕正の禅思想に関する論考は余り多く存在しない。その理由は若くして逝去されたことに由来するものであるが、それでも、残された著作論文と、新刊紹介の書評を手掛かりにして彼の禅思想について少しく考察してみたい。知られる如く顕正は鈴木大拙の自他共に認める第一の弟子であった。顕正自身も学生の頃から熱心に相国寺（臨済宗相国寺派本山）で参禅されたことが伝聞されている。後には大拙にかわって禅の講義を担当している。顕正の思想的発展は概ね大拙のそれによる。

大拙著の英文『楞伽經の研究』を論評する中で「大乘仏教の

經典中には、その高き仏教經驗の含まれているにも拘わらず未だその全き研究の試みられずして残されているものがある。楞伽經の如きもその一つである。……大乘仏教の哲学に於いても且又禅宗の經典中にあつても重要な位置を占めているものである。然るに諸種の理由（殊に至極難解のため）によって、此經の研究は殆んど為されていなかった。」ことを指摘し、たとえばそれが「覚書」の性格からくる困難さであったとしても、それ以上に宗教的「經驗」の確かなることの重要性に気付かされるのである。又「著者の智的洞察の透徹と禅的體驗の奥妙と直感的把握の鋭敏とが至妙に溶融して自ら成る壯絶の行文は快味津々たるものがある。」といって、此經の中心を成す主要教義は「自証聖智」であり、全ての論理的、哲学的、心理的説明はこの「自証聖智」が達摩の體驗内容であることを指すものである。之によって本經は、その存在理由を主張するのだといっているのである。

禅經驗の表出に関して、顕正は大拙の「禅の見方」について「宗教は先づ經驗を以つて出発し、爾後に（広義に於ける）哲学が来るのであつて哲学的批判は、かかる事実に立脚して行はれなくては正鵠を失する。」と指摘する。故に禅經驗は「少なくともそれが禅的直観の何らかの体系を持ち得る限り、諸種の禅的条件に規定せられねばならぬ」といっている。

宗教における「經驗」の重要性はその表現としての論理的、哲学的方向を決定するといっても過言ではない。經驗ありてしかる後に表現がなされる。この点について顕正は「発阿耨多羅三藐三菩提心」及び「發菩提心」の漢訳について次の如くいっ

ている。前者については、一般的にはその漢訳は「無上菩提心を発する」と見られるが、これは正確ではない。原義は「菩提を發せる心を持つ」ことである。即ち本義は「菩提に對する欲求を懷く」ことである。経験的にはそういう意味でなければならぬのである。何か特別に「菩提心」という心があるように考えては靜態的になる。一種の回心でなければならぬ。「全く新なる精神的ビスタを開拓する精力の新たなる中心の発見」といい、「その後のその人の行為を決定する方向を与える」といつている。

後者の漢訳「發菩提心」は「菩提の思想を目覚ます」との意味に取りやすいが、それは誤りである。経験的には「菩提への欲求を懷く」ことであり、正しくは「無上菩提の成就に對する精神的渴仰を懷く」ことである。今此所にあげた漢訳の二例は、いずれも正しくは経験の所産からでなければならぬ。丁度それは大慧が警告した如く「看經の眼を具せずんば則ち經中深妙の義を窺い測る事能はず」との言葉を想起せしめるのである。それは又真宗の祖親鸞が『教行信証』卷三に『無量壽如來會』からの引文中、「至心廻向」について、正統の読み方に従えば「至心に廻向して」だが「至心に廻向したまえり。」と独自の読み方をされた。これによりて廻向行は弥陀から信者へと大転回する。この驚天動地の経験あつて始めて可能なのであつた如く、宗教は全て、かかる宗教的経験が土台になければならないといわねばならない。

## 謡曲における仏僧

——僧ワキの宗教的機能について——

今 泉 隆 裕

謡曲は曲目によって「幽霊能」（一般的には「夢幻能」・「現在能」の二つの区別がなされる。今回、取り上げるのは幽霊能のワキである。幽霊能は、死者の霊を中心として展開する告白劇（懺悔劇）である。そこに登場するワキは多くの場合、諸国一見の僧であり、この僧ワキは旅の途上で在所の幽霊（シテ）と対峙することになる。

これまでの能楽研究においては、幽霊能におけるワキは「観客の代表」とする考え方が支配的であり、ワキは文字通り脇に控え端座しているばかりで、シテの演技をただ見守る存在とみられ、あまり注目されてこなかった（野上豊一郎「シテ一人主義」）。

しかし、僧ワキは霊的存在との交流者という意味で、シャーマンの職能者と捉えることが可能であろう。舞台上に幽霊を登場させる、世界的にも稀有な芸能として知られる能楽であるが、その舞台上で幽霊を目のあたりにする劇を仕組む上で僧ワキの存在は欠くことのできない役割を担っていると考える。本来なら注目されるべき特性といえよう。

そこで本発表では、幽霊能における僧ワキを、シャーマニック性格をもった呪術—宗教的職能者として把握し、これまでのシヤーマニズム研究における分類で、どの類型に該当するか。ま